

下級生の英語の発音に関する調査報告

——日本語の影響を中心として——

丹 羽 義 信

Ⅰ ま え が き

本研究は昨年の本紀要で発表した「英作文に現れた誤に対する日本語の影響に就いて」と云う論文の継続的研究である。その論文に於て, *syntax*, *word*, *punctuation* の誤について日本語の *structure* の影響が大きい事を結論したのであるが、発音に就いては、その重要性にも拘らず、調査が出来なかった為、それを調査してみようと思ひ立った。又日本語との関係のみならず、発音の誤を類型にまとめ、今後の発音指導の資料にして見たいと思う。もとより二年生一組 51名について行った調査で、規模が小さく、中間報告である事をお含み願いたいと思う。

方法としては、録音テープを利用したが、客観的に記述する事は仲々困難であった。最初 *Fulbright* 教師として来校中の、*Mrs. Holland* の発音を録音し、次に個々の生徒の録音をし、何度も比較する事によって、記述を正確にしていった。信頼度に就いては、*blackboard*, *pencil* を二ヶ所づゝ入れて置いて記述を比較して見たが、大体一致していた。がしかし、聴覚印象は依然不完全なものである事は免れず、本格的には、波形にとり分析すべきである。調査表に用いた単語は以下の如くである。

sheep, *cat*, *desk*, *club*, *blackboard*,
dog, *watch*, *George*, *Knife*, *mouth*,
glass, *stove*, *eyes*, *with*, *name*,
hen, *pencil*, *long*, *cow*, *boy*,
September, *platform*, *blackboard*,
February, *redpencil*, *lunch-time*,
Wednesday, *homework*, *pencil-box*,

English, *dog-race*, *scrap-book*

この表は、末尾子音の次に母音の残存する事を調査するのを目的として作られ、従つて主な末尾子音は大体含まれている。又単語は生徒が皆よく知っているものから選んである。尚語中の子音の後の母音の残存、例えば *red-pencil* の場合に「*redo*」となるかどうかをも調べたいと思つたが、次の子音の質が影響するので、すべての場合をあげる事は出来なかった。

対象は中学二年51名で、此の組は週4～5時間一年より英語を勉強し、辰見敏夫外共著「教科別総合標準学力検査(中2年用)」に於て偏差値平均72.1と云う最優秀クラスである。色々な都合で此の組を取あげたが普通の学級の場合は、誤及日本語の影響はずっと多くなると思われる。尚調査実施時期は一学期の終、六月下旬であった。

Ⅱ 調 査 結 果

上述のような調査表、対象、方法によって調査した結果、大体次の三点に誤の類型をしぼって見た。

1. 子音(殊に末尾子音)の次の母音の残存
2. 末尾子音のよわまり
3. 全般に誤り易き発音

Ⅱ.1. 子音の次の母音残存の調査

図表1に調査結果を示した。前半に末尾子音の場合を、後半には語中の場合を一部乍ら附加した。それぞれの単語をあげるのを省略したが、上の調査表から拾いあげたものである。観察結果を三段階に記述した。即ち“+”は日本語の「子音+母音」と同程度に母音がきこえた場合、“-”

各 個 研 究

はごく僅かではあるが明かに母音がきこえる場合 音を示す。
無記号は中間段階を示す。又 i . u . o . は残存母

	-p	-t	-k	-tʃ	-f	-s	-ʃ	-θ	-b	-d	-g	-dʒ	-v	-z	-ʒ	-m	-n	-l	-ŋ	-t	-k	-p	-b	-b	-tʃ	-z	-m	-l	-g	子音の強さ		
1																															i	-
2									u-																							±
3																																±
4																																±
5																																±
6																																+
7																																±
8																																±
10																																±
11																																±
12																																±
13																																±
14																																±
15																																±
16																																±
17																																±
18																																±
19																																±
20																																±
21																																±
22																																±
23																																±
24																																±
25																																±
26																																±
27																																±
28																																±
29																																±
30																																±
31																																±
32																																±
33																																±
34																																±
35																																±
36																																±
37																																±
38																																±
39																																±
40																																±
41																																±
42																																±
43																																±
44																																±
46																																±
47																																±
48																																±
49																																±
50																																±
51																																±
52																																±
53																																±

1~53は生徒の名簿番号を示す
但 9, 45, は欠席のため除外

これを見ると末尾子音の次に如何に多くの母音が残存しているか分かるが、更によく調べると有声音と無声音とで残存の率が違う事がわかる。有声音の次に母音が残る事は音声学上からも一応考えられるが、その点をはっきり表に示したのが図表2である。

図表2 有聲, 無聲子音別母音残存数

無聲子音	-p -t -k -tʃ -f -s -ʃ -θ
母音残存数	1 4 4 2 2 1 1 0
有聲子音	-b -d -g -dʒ -v -z -ð -m -n -l -ŋ
母音残存数	12 0 8 19 12 10 22 3 0 20 23

尚此の調査表には -r -ʒ -h が含まれてないのは適当な単語が見当らなかったからである。扱図表2を見ると有声音の次により多くの場合母音が残る事がわかる。殊に George の [dʒ], with の [z], pencil の [l], long の [ŋ] の後に甚しい。有聲, 無聲を比較して, 全体的に有声音の次に母音が残るから, 有聲である事が原因と考えられるが, 其の他にも考えられる原因がある。[l] とか [ŋ] とか [ð] は日本語にない音で, 発音が困難な故に, 日本語化したとも考えられる。又 club とか, pencil の如き日本語になっている語は日本語流になり易いと云う事もある。逆に別の理由によって, 母音が残らなかった場合もある。例えば, -d は blackboard の場合で語が長い為, 語尾が明瞭に発音されず, 従って母音が観察されなかったと考えられる。その他個々の条件があろうが, 全体的に見て, 有聲音の後に多く残るのではないかと思われる。

次に此等の母音の残存は個人的に見るとどうか此の位のもは許されるものか, 許されぬものと云う点であるが, 個人的に見て及第する者は, よく出来るクラスに拘らず, 少かった。そしてどの子音の後にも母音が日本語のように発音されると云うのもあって, それ等の生徒に就いて見れば11番の生徒は無聲音の -tʃ -f に残るのみならず, 有聲音は全体的で -b -g -dʒ -z -ŋ の次にひどい。これだけ残ると可成日本語式発音に聞こえる。更に31番の生徒は -t -k -tʃ の無

聲音と -b -dʒ -g -z -ð -m -l -ŋ の有聲音の次に現れ此の生徒の場合は全く日本語の口で発音している。次に36番の生徒は無聲音 -t -s の次に, 有聲音 -b -g -z -ð -dʒ -ŋ の後に残っている。次に52番の生徒は無聲音 -t, 有聲音 -g -z -m -l -ð -ŋ の後に残っている。此等の生徒の子音の強さを見ると, いずれも子音が強いと云う事はなく普通の程度である。(図表1の最後の子音の強さ参照) 正しい英語の子音は, 子音が日本語より強く, しかも母音が伴ってはならない。たとえ母音がよく除かれていても, 子音が弱くは駄目である。上に述べた生徒は, 母音をなくすると同時に子音を強くする必要がある。又一時的には, 子音を強くすれば, 今まで残らなかった母音が現れる事もある。36番の生徒は子音の強さが "+" であるから子音を強くしたため, 母音が残ったとも考えられる。従って, 此の場合には母音だけを除けばよい事になる。次に子音の強さが "+" で, 母音の残存も比較的少なかった生徒をあげれば, 6番, 8番, 28番, 30番, 32番, 37番, 41番, 43番, 44番, 48番, 49番であった。30番以後は女子であるから, 女子に多い事がわかる。

此の母音の残存と云う事は, 日本語の影響によるものと考えられる。即ち日本語の音節の組織は consonant + vowel, c v 型であるのに対し, 英語は c v c 型が基調となっている。こうした phonemic structure の相違は外国語を習う場合に当然出るわけで, 日本人の場合には, c v c と云う英単語を c v c v と v を入れて発音し易いと云う事であると思う。

II. 2. 末尾子音の強さに就いて

末尾子音殊に破裂音の強さは, 日本語の場合, 英語に比してずっと弱い。にも拘らず英語の発音指導に於て, 殆んど注意されてはいない。生徒の発音を観察すると, 弱い子音に, 弱い母音を伴っている日本語の末尾音節の様な発音が, 英語の発音の中に屢あらわれている。中には末尾子音がずっと弱くなって殆んど聞こえない様な場合もあり, 図表1の子音の強さの項に "-" と記述して置いた, 又 "+" と記述してあるのが, 大体英語に近

い子音の強さの場合で記入していない場合は若干弱い場合である。個々の子音に就いて、強さを記述しようと思ったが、大体どの子音にも強さの共通性が見られ、個々の相違を捕える程、記述が正確に出来なかったのので、省略した。この表に現れている一つの傾向は、男女差と子音の強さと云う事である。女子の声が明瞭であるとか、音域が高いとか又女子の方が発音に熱心だとか、興味を持つとか色々な条件があったであろうが偶々此の組では男子は男子総数の31%しか強い子音を発音出来なかったのに対し、女子は65%も出来ている。「speakingやhearingは女子が男子より上手だ」と云う事を時々耳にするが、或はこんな事が関係しているのではなからうか。

II. 3. 発音の誤り易きもの

最も誤り易いのは中舌母音〔-ə〕で、僅か5人が正しく発音し、42人は全く間違った発音をした。〔-ə〕は September の末尾音の場合である。これに比して、homework の場合即語中の〔-ə:]は16人が間違っただけで少なくなっている。これは語末の September の -ə は、語末に開母音をとる日本語の音韻構造に反する故 open の〔-a:]となるのであろう。

次に〔-s-〕が〔-ʃ-〕に発音され易い場合だが、此の単語は pencil〔pensl〕であって、〔s〕>〔si〕>〔ʃi〕と発音が誤って行くと思われる。単独の〔s〕を発音する事はc v型に反する故母音〔i〕が発音される。すると〔si〕と云う発音は日本語にない故〔ʃi〕となるわけである。他の発音が正しく出来た生徒の多くが〔ʃi〕と発音した事は日本語の抵抗度が大きい事を物語っている。

次に〔v〕は〔ð〕になつたのが20人あった。日本語には〔b〕と〔v〕の音韻的対立がない事が原因である。同様の事は観察が無声音故充分出来なかったが〔f〕にも云えると思われる。

その外に二重母音の〔au〕、長母音〔ɑ:]とかは正しく発音されていない。又 Wednesday の末尾母音は〔-di〕となるどころ〔de=〕と開母音になる傾向が見られる。

以上の外に θ, ð, l, ŋ は日本語に音韻対立がな

いため日本人には困難な子音であるが, glass〔s〕と, mouth〔θ〕, has〔z〕と with〔ð〕の区別の出来た生徒は6名,〔l〕の発音を意識し得た生徒が18名,〔ŋ〕が〔ng〕とならなかつた生徒が11名であった。

III 結 論

以上で母音の残存, 子音の強さ, 誤り易き発音に就いての調査の結果を概略的に述べたが、日本語の音韻構造が殆んどの誤の原因を為している事がわかる。発音行動は反射行動である故、syntax 其他の場合より多く、母国語の影響を受ける事が考えられる。従って、英語の発音指導には、母国語の発音を先ず研究し、その比較の上に教材や教授法が考えられるべきである。従来子音の強さとか母音の残存の如き frequency の極めて多い誤が教授上等閑にされていたのは、母国語の影響を無視していたからである。外国人のための英語音声学をそのまま日本人の教授テキストとして使用した結果であろうと思う。発音の指導の場合程、C.C. Fries の次の言葉がぴったりする場合はない。

The most efficient materials grow out of a scientific descriptive analysis of the language to be learned carefully compared with a parallel descriptive analysis of the native language of the learner. Only a comparison of this kind will reveal the fundamental trouble spots that demand special exercises and will separate the basically important features from a bewildering mass of linguistic details. (Language Learning, 1953, p. 36)

さて、上の調査の結果具体的には、次の様に述べる事が出来る。従来、単独の子音とか母音を先ず正しく発音出来るように教育したが、同時に或いはそれより前に、もっと frequency の多い英語の音韻構造、即ち末尾子音の強さと母音を除いて発音する要領を教育すべきである。その場合、母音の除去に就いては、有声子音の後に特に力を入れて教育しなければならない。末尾子音の発音の要

下級生の英語の発音に関する調査報告

頷を身につければ、文章の reading は自然に容易になり、英語らしい流暢さを加える事になる。若し此の習慣を無視して、細かい個々の発音の調音を教えても、英語らしい発音が出来ないのみか、

非常に無理な口のひらき方をする事によって、energy を消耗する結果となり読む事を嫌いにする原因になる事もあると思われる。